

藻谷浩介著「実測、ニッポンの地域力」日本経済新聞社 2007年9月20日刊を読む

1. 面白いのは那須地域だ。ここの成長は製造業だけによるものではなく、地産地消と観光と都会からの定住者の増加が結びついた結果と推測される。事実、事業所統計による「事業所数」は、宇都宮や小山、そして人口の流れ込む東京大都市圏でも減る一方なのに、那須地域では減っていない。これは、事業主の高齢化に伴う既存の中小事業所の廃業を補うだけの新規開業があるということだ。商業・サービス業だけを取り出しても同じ傾向なので、背景には集客交流産業の活性化があると考えてよい。
2. 実際、日光・鬼怒川の観光が不振を極めているのに対し、那須山麓の温泉郷は(塩原を除いて)健闘している。恵まれた自然と足の便の両立から、某有名女優のように移住者も多い。これは、長野県や山梨県の一部でも起きている動きだ。
3. 自動車産業の活況は、いずれ剥げ落ちるかもしれないが、地産地消と定住に結びついた観光は底堅い。同じ足利銀行エリアであっても日光・鬼怒川と那須ではまったく状況が異なるのに、一口に「銀行破綻で景気真っ暗」と決め付けるのは、現場に足を運び、数字をチェックしてからにすべきだ。環境のせいにはせず、個別の経営を工夫すれば、結果は大きく違ってくる。
4. 栃木には、北関東最大の都市集積・宇都宮の市街地をどうやって再生させるかという課題もある。確かに繁華街には空き店舗が増えている。だが、定点観測していると、若者の新規出店も目立つ。水戸や前橋とは明らかに違う流れがある。政令市並みの100万人の都市圏集積を活かせる若い力は、きっと出てくる。
5. 日本の地域経営の元祖ともいえる二宮金次郎が活躍した当地。自動車産業が豊かなうちに、新しい芽を活かせるかどうか、問われているのだ。

#### [コメント]

全国津々浦々を足で歩き通し、地域の活性化を考え続けている藻谷氏に考えさせられることは多い。那須(NASU)の素晴らしさ、発展可能性の高さを十分生かして、活性化を図りたい。

- 2009年2月21日林明夫記 -